

附
文學全集

谷崎潤一郎集



昭和二十八年六月十日 初版印刷
昭和二十八年六月十五日 初版發行

昭和文學全集 15
谷崎潤一郎集

著者 谷崎潤一郎

發行者 角川源義

印刷者 村尾一雄

東京都新宿區市谷加賀町一ノ二二

發行所

東京都千代田區
富士見町二ノ七

角川書店

振替東京一九五二〇八
電話九段一〇九四・八七〇八

本文紙 本州製紙株式會社
クロース 日本クロス工業株式會社
印刷所 大日本印刷株式會社
製本所 宮田製本所

谷崎潤一郎集

昭和文學全集

角川書店版

目次

卷頭寫眞

筆蹟

記（まんじ）

吉野葛

盲目物語

武州公秘話

春琴抄

聞書抄

猫と庄造と二人のをんな

少將滋幹の母

解説

年譜

七

全

一八

一五

二九

四四

五三

三四

三八五

三六

谷崎潤一郎集

わすれぬ松沢雪平の長子にて
たゞふ店も色そちりく

巨印

その一

先生、わたし今日はすつかり聞いてもらふつもりで伺ひましたので、折角お仕事の中とかまひませんでやろか？ それはそれは委しに申し上げますと實に長いので、ほんまにわたし、せめてもう少し自由に筆動きましたら、自分でこの事何から何まで書き留めて、小説のやうな風にまとめて、先生に見てもらはうか思ひましたので、先生……實はこなひだ中ひよつと書き出して見ましたのですが、何しろ事件があんまりこんがらがつて、どう云ふ風に何處から筆着けてえゝやら、とてもわたしなんぞには見當つけません。そこでやつぱり先生にでも聞いてもらふより仕樣ない思ひましてお邪魔に出ましたので、でも先生わたしのために大事な時間減茶々にしられておしまひになつて、えらい御迷惑でございますやろなあ。ほんまに宜しございますか？ わたし先生にはもう毎度々々おやさしいにしていたでございますから、つい御親切に甘える氣になつて、御厄介にばかりなりまし

て、どないに感謝してもしきれへんくらゐや思てます。それであのう、いつかも大へん御心配かけましたあの人のこと、あれからお話せんなんのんですが、あれはあの後に申し上げました通り、あないに云うて下さいましたので、自分でもしみ／＼考へまして、あんなりぶつ／＼つり絶交してしまひました。その當座は未練とでも云ひますのんか、何かにつけて思ひ出されますもんですから、家にいてましてもまるでヒステリーのやうになつてましたけど、そのうちにだん／＼あの人がえゝことない男やつた云ふことはつきり分つて來まして、……主人も私が前は始終そは／＼して音楽會や何や云うては出歩いてばかりありましたのんに、先生の御宅に寄せてもらふやうになりましてから、すつかり様子變りました、繪エ書いたり、ピアノの稽古したりして、一日家に落ち着いてますもんですから、「この頃はお前も女らしなつたなあ」なんぞ云ひまして、陰ながら先生の御好意よろこんでました。尤もわたし、あの人の事に就いては何も主人に云ひませなんだ。「夫に過去のあやまち隠しとくのんよろしくないから、——殊に肉體上の關係なかつたのなら告白し易い譯やから、すべてを打ち明けておしまひなさい」と先生は云うて下さいましたけど、……けどどうも、……それはまあ、主人にしましても或はうす／＼氣イついてたかも分れしませんのですが、私の口からは何や云ひに

くうもありましたし、此の後間違ひないやうに自分さい注意してたらえゝのや思ひまして、何事も胸に收めてたのんです。ですから主人は私が先生からどんなお話伺うて來ましたやら、それは知りませんでしたけど、いろいろ爲めになること教せてもらたに違ひない思て、さう云ふ心がけになつたのんはえゝ傾向や云うてましてん。そんな譯で、それから暫くは大人しいに家引つ籠つてましたもんですから、此の様子やつたらまあ安心や思ひましたもんか、さうさう己も遊んであらんから云うて、大阪の今橋ビルディングに事務所借つて辯護士開業しましたのんが、あれが昨年の二月頃でしたかしらん。——はあ、さうです。大學の方は獨法やりましたのんで、辯護士にならいつてもなれたのんです。始めは何でもプロフエツサアになりたいやうに云うてまして、ちやうど私のあの事件ありました時分には、引きつゝいて大學院の研究室の方に通てましたのんですが、辯護士やる氣イになりましたのんは別に此れちふ理由あつたのんではあれしませんが。さういつ迄も私の實家の方に世話にばかりなつてましては義理も悪いし、私に對しても頭上らんとするたのんですやろ。いつたい主人は大學時代に秀才や云ふ評判で、たいへんにえゝ成績で卒業しましたもんで、さう云ふ人間ならば云ふのんで、嫁に來たとは云ふものの、婿を取るのも同様にして

結婚したのんです。そいでもう私の親たちは主人を信用してまして、いくら財産も分けてくれています、まあ／＼あせるには及ばんから、學者になりたかつたら學者になるで、ゆつくり勉強するがえ。洋行もしなければ夫婦で二三年彼方^{あつち}に行てくるがえ、など云うてくれています。——最初は主人も大そう喜んで、そんなつもりもあつたらしいのんですけど、——私があんまり我が儘やのんで、實家の方笠に着て威張るのんや云ふ風に取つて、それが癪に觸つたのかも分れしませんが、しかし性質が學者肌に出てまして、いつ迄たつても書生流のぶつきらばう抜けしませんし、あゝそは下手です、それは／＼人づきあひ悪い方ですから、辯護士なんぞになりましたところで一向仕事やかいあれしませんでしたでも毎日事務所だけはきちん／＼出てましたが、さうなりましたら、私の方は一日家にぼんやりしてまして、しやうないものですから、自然また、いろ／＼と、一旦忘れてたことが胸に浮かんて来るのんです。前には暇ありますと歌作つたりしましたが、歌は却つて思ひ出の種になりますので、もう此の頃はせえしませんやう。——そこで私、かうやつてはろくな事考へんさかい、これは何とかと思ひまして、——先生は御存知でせうか、——あのう、天王寺の方に女子技藝學校云ふのんありますね。私立の詰まらん學校です

ねんけど、繪工と、音楽と、裁縫と、刺繡^{ししゅう}と、それからまだ外にも何や、まあそんな風に科ア分れてまして、入學の資格なぞむつかしいことも何にもなうて、大人でも子供でも自由に這入れます。わたし前にも日本畫稽古してまして、下手ですけど、その方なら幾らか趣味持つてますもんですから、それい毎日、朝は主人と一緒に出来るやうにしまして、兎も角もまあ、通ふことにしましてんわ。尤も毎日とは云ひましても、そんな學校ですから、休みたい時は勝手に休んだりしましたけど、——

主人は繪工や文學やには、と、趣味ない方やのんですが、私が學校に行きますことは賛成してくれまして、それは結構や、えゝ思ひつきやさかい精出して行くがえゝ云うて、自分から勧めたくらみやのんでした。毎朝出かけますのんにも、私が行きますのんは九時のこともあり、十時のこともあり、自分の都合でいろ／＼になることありましたけど、主人の方も事務所暇やのんですさかい、何時にならうと大概待つてゝくれています、阪神電車で梅田まで一緒に行き、それから二人圓タクに乗つて堺筋^{さかいすぢ}の電車通りの今橋の角で主人おろしまして私はずつとその車で天王寺に行きます。主人はさう云ふ風にして一緒に出かけますこと楽しみにしてたらしいので、「またもう一遍學生時代に復つたやうな氣いするなあ」など云ひますから、「夫婦づれで自動車

で通ふ學生あつたらをかしいやないか」云ひましたら、あは／＼笑うたりなんぞして上機嫌でした。午後に歸ります時分にも成るべく誘てくれるやうに云ひますのんで、電話で打ち合はせしめて、事務所い寄つたり、難波や阪神で待ち合はしたりして、一緒に松竹座なぞい行つたりしました。さう云ふやうな鹽梅で主人との間は大變工合ように行つてましたのんですが、あれは四月の半は頃でしたか、わたしほんの詰まらん事で學校の校長さんと喧嘩してしまひました。それはあのう、妙なことで、學校でモデル使て、それにいろ／＼の服裝さしたりポーズ取らしたりしまして、——日本畫の方は裸體のデッサンはやりませんですけど、——それ寫生する時間ありますね。ところがちやうどその時分に使てたのが、Y子さんちふ十九になる娘さんで、大阪では有名な美人のモデルやさうで、それに楊柳觀音^{やうりゅうくわんおん}の姿さしまして、——まあ、いくらかそんな風すると裸體に近うなりますのんで、多少裸體の研究も出来る云ふ譯やつたのんです。私それを外の生徒たちと一緒に寫生しますと、或る日校長先生が教室い這入つて來られて、「楯内^{たてうち}さん、あなたの繪工はちよつともモデルに似てをらんやうですな、あなたは誰ぞ、外にモデルあるのんではありませんか」云はれて、何や斯う、意味ありげに笑はれますね。それが校長先生ばかりでなうて外の生徒たちも、先生が笑は

れるあとからクスクス忍び笑ひするのんです。わたし思はずはつとしまして顔赧うなりましてんけど、どう云ふ譯で赧うなつたのんかその時は自分で分れしませんでした。今になつて考へますと確かにあの時赧うになつたやうな氣いしますねんけど、或はさうでなかつたかも分れしませんでした。しかし「外にモデルがある」云はれましたら、さう云はれる迄は自分では意識してえしませんでしたのんに、何やらんはつと胸いこたへるもんありましてん。でも、そんなら誰モデルにしたかちふことは、はつきりしてたのんではあれしませんでした。たゞ何やしらん頭の中にY子さん以外の或る人の印象刻みついて、Y子さんを眼の前に見ながら、知らず識らずその印象の方モデルに使ながら、使ふつもりもなうて、自然と筆がその人の姿寫してた、云ふだけやのんです。

もう先生にはお分りになつてをられますやろが、その、わたしが無意識のうちにモデルにしてた人云ふのが、――どうせ新聞にも出ましたのんですから、云うてしまひますが、――「徳光光子さんやのんです。(作者註、柿内末亡人はその異常なる経験の後にも割に獲れた痕がなく、服装も態度も一年前と同様に派手できらびやかに、末亡人と云ふよりは令嬢の如くに見え典型的な關西式の若奥様である。彼女は決して美女ではないが、「徳光光子」の名を云ふ時、その顔は不思議に照り

輝やいた)けど私は、まだその時分には光子さんとお友達になつた譯ではあれしませんでした。光子さんが洋畫の方習てをられて、教室も遠てましたよつて、もの云ふ機會もなかつた筈です。ですから光子さんの方では私の顔知りなされしませんでしたか、知つてなさつても別に氣いに留めてをられなんだのんですやろ。私の方にしましてはそれほど光子さんに注意してたとは思はれしませんが、でも何となう好きさうな人や云ふ風に考へてたに違ひないのんです。それもしかし、もの云うたことないくらゐですよつて、性質とか氣だてやとか、そんなこと分れしませんでしたんけど、――まあ、何となう、たゞ全體の感じやのんですなあ、さう云へば私が案外早うから光子さんに氣いつけてました證據には、もうその時分に誰から聞いた云ふでもなしに、光子さんの名前やお所を、――船場の方にお店のある羅紗問屋のお嬢様で、住まひは阪急の蘆屋川にあるのや云ふやうなこと迄ちやんと知つてましてん。それでわたし、校長さんにそんなこと云はれましたのんで、あとでいろ／＼考へてみたのんですが、成る程その繪工光子さんに似てますけど、故意に似さした云ふのんではなし、また故意に似さしたところがある、ぜんたいモデルにY子さん使ふ云ふのはY子さんの顔寫すのん目的とはちがひますねんやろ? たゞY子さんに觀音さんみたいな姿さして、その體つきや、

白衣の襖の工合研究して、なほその上觀音さんの感じ出せたらえ、譯ですやろ。Y子さんはモデル女の中では美人かも分れしませんが、光子さんの方がもつと美人で、その繪工の感じに合うてるとしましてしたら、光子さんモデルにしても差支ひないではあれしませんでした。――私そない思たのんですねん。

その二

ところがそれから二三日たちますと、又モデルの時間に校長先生が這入つて來られて、私の繪工の前の立ち止まつてにや／＼笑はれますねん。そして「柿内さん」云ひなさつて、すますモデルに似んやうになつて來ますね。いつたいあなたは誰モデルにしてをられるのんですか」と、冷やかすやうな眼つきで私の顔じいツと視つめなさるのんです。「おや、さうですかしらん。モデルに似てえしませんが」と、私頼にさはりましたもんですから、わざとにそない云うてやりましてん。そやかと校長先生は繪工の先生ではないのんですやろ? ――はあ、日本畫の方の受持ち筒井春江先生やのんで、當時お越しになる譯やなうて、とき／＼やつて來られて、何處が悪いやとか此處をこないせえやとか云はれますのんで、常は生徒たちが勝手にモデル見て畫いてますねん。校長先生云ふのんは、隨意科の方に英語ありまして、それ教せてなさるのんや

さうですけど、學士でも何でもあれしませんが、何處の學校出られたのんか、學歴やかいもろくろくないらしい人やのんです。それは後になつてから分りましてんけど、教育家云ふよりは學校商賣上手な人やのんで、つまり一種のやり手やのんですねんなあ。さう云ふ校長さんですから繪工のことなんぞ分る筈あれしせんし、餘計な嘴くちばし入れる必要はないのんです。それに又、學科の方はたいがい専門の先生たちに任しきりにしてめつたに教室見廻ることやかいあれしせんの人に、その時間に限つてわざ／＼やつて來られて、わたしの繪工何や彼んやと云ひなさるのんですねん。「へえ、さうですかなあ、あんたは此の繪工此のモデルに似てる積りなんですか」と、皮肉な口調で云はれましたもんですかい、此方も空徳くうとくけてやりまして、「はい、わたし繪工は下手ですから、似てえへんかも分れしせんけど、でも自分では一生懸命モデルの通りに寫しました積りです」云ひますと、「いや、あんたは下手ではありせん、なかなか上手に畫けてます。しかし此の顔は、どうも誰ぞ外の人に似てるやうに思はれますね」と、又そない云ひなさるのんです。「ああ、顔のことですか、顔はわたし、自分の理想にかなふやうに畫いてみたのんです」云ひますと、「ではあんたの理想云ふのは誰のことですか」とえらいひつこいですねん。それからわたし、「此れは理想やのんですから、別

に誰かふ實在の人間描いた譯ではあれしせん。觀音さんの顔にふさはしいやうに成るだけ清らかな感じ持たしたのんですが、そいではいけませんですやろか。顔までモデルに似さゝんと悪いのんですやろか」云ひましてん。すると、「あんたはたいそうむづかしい理窟りく云ひなさる。しかし理想通りのものが思ひのまゝに畫けるやうやつたら、此の學校の繪工習ひに來るには及ばん。理想通りに畫かないからこそモデルに就いて寫生するのんではありせんか。自分勝手の繪工盡くくらゐならモデル使ふ必要あれしせん。ましてこの觀音さんがモデル以外の或る實在の人間に似てるとしたら、あんたの理想云ふもんも甚だ不眞面目に思へますね」云はれるのんで、「わたしちよつとも不眞面目とちがひます。假に此の顔誰ぞに似ても、その人の顔觀音さんの感じ出すのに適しましたら、それ寫しても藝術的に疚しいことない思ひます」云ひますと、「いや、それがいかんのんです。まだあんたは一人前の藝術家ではありせん。あんたがその人の顔清らかであると感じられても、萬人がさう感じるかどうか、それが問題です。さう云ふことから兎角誤解が起るのんです」云ふ譯ですもん。「へえ、誤解で、どんな誤解起りますかしらん」ぜんたい似てる／＼云うて、誰に似てるのんですか、どうぞ云うて下さい」云うてやりまして、ちよつとどきまぎして、「あんたは強

情な人ですねえ」云はれて、そんなり校長先生は黙つてしまひりました。わたしその時は校長さんやり込めてやつたのんで、喧嘩に勝つたやうな氣イして、えらい痛快でしてんわ。けど大勢の生徒たちの前で議論したもんですよつて、えらい評判になつてしもて、間もなうけつたいな噂うわさひろまるやうになりました。つまりわたしは光子さんに對して同性愛捧たてまつげてる、光子さんと私とが怪しい云ひますねん。——それが前にも云ひましたやうに、まだその時分は光子さんと物云うたこともなかつた程でしたさかい、出鱈目でたらめも出鱈目、ひどい誑おどろやのんです。尤もわたしは、うすうすみんなが陰口云うてゐることぐらゐ感じてましたもんの、それがそないに騒がれてやうとは夢にも知りませなんだ。何せ身イに覺えないことやのんですから、何云はれても平氣なもんで、まあ、世間の人云うたらたいがいえゝ加減なことを云ひ觸ふらすもんや。附き合つてもめえへん人同士怪しいやなんて、なんぼ作りごとにしたかてようまあそんな誑おどろばつかり云へたもんや思て、あんまり馬鹿馬鹿しいて腹も立てしませなんだ。たゞ心配になりましたのんは、わたしはそいであかぬしませんけど、光子さんの方はどう思てなさるやら、嘸なほかしえらい係り合ひになつて迷惑してはるに違ひない思ひましたら、それから斯う、學校の行き復りなぞに出遭ふことありまして、何や氣イさして、前みたいにな

しげく／＼と見守ること出来しませなんだ。さうか云うて、思ひ切りよう此方から話しかけて、あやまる云ふやうなことも、——それが却つてけつたいなことになりまし、なほさう迷惑しなさるかも分れしませんのんで、そないする譯にもいけしません。そんでわたし光子さんに出遇ひますと、出来るだけあやまる心持外に現はすやうにして、小さうなつて、下向いて、こそ／＼逃げるやうに傍通つてはれへんやうか、どんな眼つきしてはるか、やつぱり氣が／＼りやもんですから、擦れちがふ拍子にぞうツと顔色うかうたりしました。ところが光子さんの様子前とちよつと快に思てなさる風にも見えしません。あ、さうさう、此處に寫眞持つて來ましたよつて、此れ見て下さいませ。此れは揃ひの着物出來ましたとき二人で記念に撮りましたのんで、新聞にも出たことある問題の寫眞やのんです。此れでもお分りになるやうに、かうして並んでましたら、わたしに引き立て役勤める形で、光子さんは船場あたりの娘さんの中でもちよつと飛びきりの器量やのんです。(作者註、寫眞を見ると、お揃ひの着物と云ふのは如何にも上方好み（うへがうま）のケバケバしい色彩のものらしい。柿内未亡人は束髪、光子は島田に結つてゐるが、大阪風の町娘の姿のうちにも、その眼が非常に情熱的で、潤ほひに富

んでゐる。一と口に云へば、戀愛の天才家と云つたやうな氣魄に充ちた、魅力のある眼つきである。たしかに美貌の持主には違ひなく、自分は引き立て役だと云ふ未亡人の言はずしも謙遜ではないが、此の顔が果して楊柳觀音の尊容に適當かどうかは疑問である) 先生はこんな顔だちでないお考へになりますか? 日本髪よう似合うてますやろ? ——はあ、お母様日本髪好きやとか云ふことで、とき／＼結やはりまして、學校いもその頭で來やはりましてん。——何せそんな學校ですから、制服なんぞあれしませんし、日本髪の着流しでも何でもかめしませんのんですから、わたしなんか袴穿いて行たことあれしませなんだ。光子さんも、たまに洋服着なさることありましてんけど、和服の時はいつでも着流しでしてん。此の寫眞では髪のせいで私より三つぐらゐ若うに見えてますけど、ほんまは一つ歳下の二十三、——生きてをられたら今年二十四ですね。しかし光子さんの方が一二寸せえ高いでししたし、それに綺麗な人云ふもは、自分では器量鼻にかけへんつもりでも、やつぱり何となう自信のある様子態度に現れるもんですやろか、それとも此方に引け目ありますとそない見えますのんですやろか、その後親しいになりましたからで、歳から云ふとわたしの方が姉さんでありながら、いつでも妹みたいな氣イしてましたん。

で、その時分、——と云ひますのんは、話前に戻りまして、まだお互にももの云はんとてました時分、前に云ひましたやうなけつたいな噂立ちましたことは光子さんの耳にも這入つてえへん筈あれしませんのんに、光子さんの様子はちよつとも前と變れしませんねん。わたしの方では疾うから綺麗な人や思て、噂立ちません時分には、光子さんが通りなきと、それとなう傍に寄つて行つたりしましてんけど、光子さんの方ではとんと私やかい眼中にないやうな鹽梅で、すうツと通つてしまひはりますやが、その通られた跡の空氣までが綺麗なやうな氣イするのんです。もしも光子さんが例の噂聞いてなさるとしたら、なんぼ何でも私云ふもんに注意しなされへん譯あれしませんやろ。イヤな奴ツちや思はれるか、氣の毒や思ひなさるか、何とか素振に見えさうなもんですのんに、さつぱりさう云ふ風しなされへんもんですから、私の方も段づ／＼しいになりまして、また傍に寄つて顔のぞき込むやうになりましてん。すると或る日、お午の休みに休憩所ではつたり出遭ふと、いつでもすうツと澄まして通り過ぎてしまひなさるのんに、どう云ふ譯やにツこりしなさて、眼で笑ひなさるのんです。それで私思はずお時儀してしまひましたら、直ぐつかつかと寄つて來られて、「わたし、あなたにこなひだから大變失禮してました。どうぞ惡うに思はんとて頂戴」云ひなさいま

すねん。「まあ何云ひなさるんです。わたしこそ託らないかなんだんですが」云ひますと、「あんたは託りなさることあれしませんが、あんたは何も知りなされへんのんです。わたしはちやうど、それよとしてる者あますから、氣イつけないや」云ひなさいますねん。「へえ、それは誰ですか」と尋ねますと、「校長先生ですわ」と云はれて、「此處では委しい話出来しませんさかい何處ぞ外へ行って、お晝御飯一緒に付き合つてもらはれませんか？ そしたらいろ／＼、ゆつくり聞いてもらひますが」云ひなさるもんですから、「何處いでも一緒にいきますわ」と、二人で天王寺公園の近所にあるレストランに行きました。それから光子さん洋食たべながら話して下さつたんですが、わたしたちの事に就いて悪い噂云ひ觸らしたのんは實は校長さんや云ひなさいますねん。成程さう云はれて見ると、用もないのに教室に這入つて来て、みんなの前でわざと私に耻搔かすやうな事する云ふのんが、だいぶんをかしい。惡意あつたために校長さんがそんな噂觸れ廻るのんかと云ひますと、目的は光子さんにあるのんやさうで、何でも彼でも光子さんの品行に就いて悪い評判立ちさいしたらえゝのんや云ふのんです。それが又どう云ふ譯や云ひますと、その時分光子さんに結婚の話持上つてまして、先はM云ふ大阪でも有名なお金持の家の

坊で、光子さん自身は氣イ進んでをられなかつたさうやのんですが、お宅ではたいそうその縁談望んでをられたし、先方でも光子さん欲しがつてをられた。ところが或る市會議員のお嬢さんと、やつぱりそのMさんへ縁談持ちかけてる人あつて、光子さんの方と競争の形になつてた。——光子さんは競争のつもりやなうても、市會議員の方では大敵が現れた思ひましてんやろ。何しろMさんの坊々は光子さんの器量にあこがれてラブレター寄越したくらゐやのんですから、それは大敵に違ひあれしませんが。それでその市會議員の方では八方い運動して、成らうことなら光子さんにケチ附けよと云ふのんで、もう今までも隨分いろ／＼と、光子さん外に男あるらしいとか、有ること無いこと云ひ觸らしてましたんやさうですが、まだそれだけでは飽き足らんと、とうど學校の方い手廻して、校長さん買収したのんですなあ。あ、さう／＼、それからその前に、——話がほんまにこんがらがつてますけど、——その前にその校長さんが、校舎の修繕するから云ふのんで、光子さんのお父様に、お金千圓一時融通して貰へまいか云うて來たことありますねんと。光子さんのお宅ではお金はたんとありまつかさい、千圓ぐらゐ何でもなかつたのんですやろけど、おほびらに寄附金募るのんなら聞えてるそれにあんだだけの校舎が千圓のお金で修繕出

来る筈もないし、分らん話や云ふやうなことで、お父様は斷られたのんやさうです。光子さんの話やと、そんなこと云うてはお金の有りさうな生徒の家頼み歩くのん校長さんの癖やさうで、借つたお金は一ぺんでも返したとあれしませんがねんと。それも校舎の修繕に使ふのんなら格別、校舎云ふのん豚小屋みたいに汚うてぼろ／＼になつたり、荒れ放題にしたあるのんです。——はあ、いゝえ、そのお金は自分の生活費に使はりますねん。校長さん云ひましても高等學問みたいな人で、おまけに奥さんがやつぱりその學校の刺繍の先生してなさつて、夫婦でお金持の生徒に取り入つては、日曜のたんびに遠足會やとか、そんなことばつかりしてはりますさかい、なか／＼暮らし派手です。それで、お金貸したげたら、たいそう御機嫌えゝのんやさうですけど、斷つたら、陰い廻つてその生徒のこゝろえらい悪う云やりますねんと。つまり光子さんにはさう云ふ恨みあるとこいさして、市會議員に頼まれたもんですから、どんな惡辣なことかしてしかねへんのです。「ですからあんなわたしに陥れるために利用しられなさつたんやわ」と光子さんは云はれますねん。「まあ、そんな深い譯あつたのんですか、そんな事とはちよつとも知りませなんだが、それにしてもあんなと私は今日までお付き合い合ひしてませなんだのんに、あんまり出鱈目が過ぎるではあれしませんが。捏造する人

も捏造する人なら、みんながそれ眞に受ける云ふの不思議でなれしませぬ」云ひますと、「あんたはそれやから呑氣や」云ひなすつて、「噂立つたもんやさかい、二人はわざと學校ではもの云へんのやと、みんなそない云うてますし、それどころか、こなひだの日曜に二人大軌電車に乗つて奈良に行くこと見た云ふ人さいあるのんですね」云ひなざるのんです。わたし呆れてしもて、「まあ、誰がそんなこと云ひますねんやろ」云ひますと、「なんでも校長さんの奥様から出たらしいのんです。それはくゝあんたが考へてなさるより十倍も二十倍も陰險やのんですから、氣イ附けなさいや」云ふ譯ですねん。

その三

そんで光子さんは、ほんまにあんたに氣の毒でなれしませぬ、すみませぬくゝと何遍も云ひなさいますから、わたしの方が却つて氣の毒になりまして、「いゝえ、いゝえ、あんた悪いことあれしませぬ。憎いのんは校長先生です。教育家ともあらうもんが、何ちふ卑劣な……けど、わたしでしたらどんなこと云はれようとちよつとも構めしませぬけど、あんたこそお嫁入り前の身いで、そんな惡辣な人たちの異にかゝらんやうに氣イ附けなさいや」と、此方からあれこれと慰めたげましたあ、「けふはあんたにすつくりお話すること出來て、ほんまにえゝことしました。こいで

やうく胸すつとしました」云はれて、「あのう、かうして二人で話やかいてたら、又なんやかんや云はれますから、こんだけにしときまひよなあ」と笑ひなざるのんです。「折角友だちになつたのんに名残り惜しいですなあ」と、わたし何や、ほんまにそんな氣イしまして暫くもぢもぢしてました。すると光子さんは「あんたさいよろしかつたら友だちになりたいのんですが、今度内い遊びに來なされしませぬか。わたしハタからだない云はれなくても悪いことあれしませぬわ」云ひなざるのんです。「はあ、わたしかつて悪いことあれしませぬわ、あんまりうるさいこと云ふのなら、あんな學校やかい止めてしまひます」云ひますと、「なあ、柿内さん、わたしのこと、知つて仲ようしてみんなが冷やかすのん見てやりたいわ。あんたどない思ひなざる？」「はあ、それがよろしいわ、そして校長さんどんな顔しなざるか見てやりたいですわ」と、わたしもすぐその氣イになつてしまひました。「そしたら、あのう、面白いことありますねん」と光子さん手エたゝいてやんちやのやうに嬉しがりなさつて、「ほんまに今度の日曜に、二人で奈良い行きなされしませぬか」「えゝ、行きまひよ、行きまひよ、それ分つたらえらい評判になりますで」——そんなことで三十分か一時間ほどの間に、お互にもうすつくり打ち解けてしまひましてん。けふはもう學校い歸るのんも馬鹿々々しい

し、何なら松竹いでも行きませぬかと、孰方からともなう云ひ出しまして、その日は夕方まで一緒に遊んで、光子さんは「ちよつと店い寄つて行きます」と心齋橋筋散歩しながら歸られて、わたしは日本橋からタクシーに乗つて今橋の事務所行きました。そんでいつでもみたく主人誘て阪神電車で歸りましたのんですが、その時主人が、「お前今日えらいそはくしてなるなあ、何ぞうれしい事でもあつたのんか」云はれましたのんで、「やつぱりいつもの様子違てるのかしらん、光子さんと友達になつたことそないに自分幸福にされたのんかしらん」と、ひとりで思ひました。「そんでもわたし、今日ほんまにえゝ人と友達になつたんやもん。——」「何んちふ人や」「何んちふ人やて、それ綺麗な人やも紗問屋あること知らん？ そことお嬢さんやねんけど」「何處で友達になつたんや？」「同じ學校の人やわ、——それが、あのう、わたしとその人と、こなひだからけつたいな噂立つてなあ、——」「わたし別に疚しいことやかないもんですさかい、面白半分校長先生と喧嘩したこと、一から十まで話してしまひますと、「ずるぶんひどい學校やなあ。けどお前がそないに美人や云ふのんなら、僕も一遍會うてみたいもんやがなあ」と、冗談にそない云うてました。「いまにきつと内いも遊びに來なざるやろ。わたし此の次の日曜

に、一緒に奈良に行く云うて約束したんやけど、行つたらいかん?」「そら行つてもかめへん」主人はそない云ひまして「校長さん怒るぜエ」云うて笑てましてん。

明くる日學校に行きますと、きんの一緒に御飯食べたことや映画見に行つたこともういつの間にやら知れ渡つて、「柿内さん、あんたきんの道頓堀歩いてなさつたなあ」「お楽しみやなあ」「あれ一體誰やつたなあ」なんて、女の人云うたら、も、ほんまにうるさいのんです。そしたら光子さんは又それ面白がりなさつて、知つて傍い寄つて來られて、此れ見よがしにしなさるのんです。さう云ふやうなあんばいで、それから二三日するうちに、えらい仲好うなつてしまひました。校長さんは却つて呆れてしまはれたのか、たゞ恐い眼エしてじつと睨んでをられるだけで、もう何とも云ひなされしません。光子さんは「なあ、柿内さん、あの觀音さんの繪エもつと私に似るやうに書いて御覽。そしたらどないに云やはるかしらん」云ひなさるのんで、前よりもつと似るやうに直しましてんけど、校長さんはそんなに教室にも來なされません。わたしたちはえゝ氣イになつて「痛快やなあ」云うてましてん。

そないなつて來ると、無理に奈良に行く必要もないやうになりましたが、ちやうど四月の終りのことで、えらいえゝお天氣の日曜でしたさかい、電話かけて相談して、上六の終點

で待ち合ひして、お午すぎから若草山の方ぶらぶら歩き廻りました。光子さんは歳のわりたいたいそうおませなところありますし、又子供のやうな無邪氣なところもあつて、山の頂上い上りましたら、蜜柑五つも六つも買つて、「ちよつと見て、御覽」と、それを上から轉こばしたりしました。すると蜜柑は頂上から下までころ／＼と轉こんで、その拍子にばんと一つ往來飛び越えて、向ひ側の家の中い這入るのんで、面白がつていつ迄でもそないしてなさるのんです。「光子さん、そんな事してたら切りがないよつて蔵でも探りに行きまひよ。わたし此の山に蔵や土筆のたと生えてるところよう知つてゐるわ」云うて、それから日の暮れまどかゝつて、蔵やら、ぜんまいやら、土筆やら、たあとと探りました。——はあ、その場所ですか、あれはあのう、若草山の山が三つ重なつてゐる、その一番前の山と、その次の山との間のへつこんだ所、——あそこら邊いつたいに、ずつともう一杯に生えてまして、あの山のんは、毎年春季に山燒きしますのんで特別おいしいのんです。——そんなことでもう空大分暗なつた時分、二人とも又前の山の方へ戻つて來まして、あんまりくだぶれましたよつて、山の中途へんい腰おろして休みながら、暫くぼんやりしてます時でした。「柿内さん」と、急に光子さんが何や斯うすこし改まつた様子で、「わたしどうしてあんなににお禮云はんなんことあるねんけ

ど」云はれるのんです。「何やのん?」と尋ねますと、「わたしあんたのお蔭でなあ、あんなイヤな人のとこい嫁入りやかいせえでもえゝやうになりさうやねんわ」——さう云うて、何や知りませんけどニヤニヤ笑てなさるのんです。「まあ、又何でそんな事になつたん?」「ほんまに噂云ふもん早いもんで、もうやあんと、あなたと私のこと向い知れてしめてるねん」

その四

「ゆい、べなあ、内でその話が出てなあ」と、光子さんは言葉をつがれて、「お母さんがわたしを呼びやはつて、お前、學校でこんな噂あるさうやけど、それほんまでつか、云やはるねん。へえ、そんな噂あることはありまつけども、いつたいお母さん、何處で聞きやはりましたん? そらまあ何處でもよろしおまつしやないか。それよかそらほんまの事でつか? へえ、ほんまです、そやけど何がいつたいでんねん? 友達と仲好うしてるぐらゐで。——さう云うたらお母さんちよつとまどつきはつてなあ、そらお前、仲好うしてるだけやつたら何ともないけど、何やそれがイヤらしいこツちや云ふやおまへんか。イヤらしい事でどんな事でんねん? どんな事やかお母さんは知りめんけどな、別に悪いことやなかつたらそんな噂立つ答おまえへんやないか。あゝ、そら何でや知つてまんねん、

そのお友達云ふのがなあ、うちの顔が好きや云やばつてモデルにしやはりましてん、そんな事からみんながうち等を排斥し出しはりましてんやろ。それもう學校云うたらうるさうてなあ、ちよつとでも顔綺麗かつたら何や彼やと憎まれるよつて。——それまあ、そんな事もありまつしやろけど、と、わたしが説明したげたらお母さんめんどく／＼分つて來やばつて、そんな事ならかめへんけど、そない云うてもその何とかはん云ふ人とばつかり仲好うせん方がよろしおまつしやないか。お前も此れからが大事な體やよつて、しやうむない事あんまり云はれん方がよろしおまつせ云うて、まあそんなりで済んでしもてんけど、きつとあの市會議員なあ、向うへんの連中がそんな噂聞き搜してMの方いしやべつたのんが、それが又お母さんの耳いし這入つてしもてんわ。そやよつて、大抵縁談もあかんやうになるやろ思てんねん」「それ、あんたはそんなでえゝやろけど、お母さんがきつとわたしを嫌がつてはるわ。今に見て、御覽、わたしと交際したらいかん云はれへんかしらん？ もし誤解しられたらイヤやけどなあ」と、わたしそれが氣がゝりて、さう云ひますと、「そんなことあんた、心配せんかてかめへんわ。それほんま云うたら、校長さんが慾張りの人で、お金貸してもらへんだら惡口云ふ癖のあることや、市會議員の人に買収しられてることやらを、みんなお母さんに云うてしまを

か知らん思たけど、そんなけつたいな學校なら止めてしまひなはれ云はれさうやよつて、云はんと思いてんわ。そしたらあんたと會はれへんやうになるよつて」「あんたもなかなか隅い置けんなあ」「ふん、うちかつてスコイよつてなあ」と、光子さんはく／＼つ／＼笑はれて、「向が悪い人やつたら此方かつて利用してやらんと損やわ」「けど、あんたの方が破談になつて、市會議員のいとはんもよろこんではるやろなあ」「そしたらあんたは兩方から感謝しられるべきやわ」なんかと、お互いあれやこれや云ひ合ひまして、山の上で一時間以上もしやべつてました。わたし今迄でも若草山い上つたこと何遍でもありますが、そんなに日イ暮れてしまふまで山の上にあたことあれしませなんだのんで、あそこから夕靄の景色見たすのんは、ほんまにその時が初めてでした。ついさつき迄まだその邊に人がチラホラしてましたのんに、もうてつべんから麓までだあれも人の影あられせん。その日は割りにえらい人出でしたから、あのなだらかな、若草の生えた山の中程には、辨當のたべ残しや、蜜柑の皮や、正宗の罐が一杯散らかつて、空はまだうす明いまして、足の下には奈良の町の灯いちらちらして、遠くの方には、ちやうどわたしらの方の眞ア向うのあたりには、生駒山のケープル・カアのイルミネーションがずうつと數珠のやうにつながつて、紫色した靄のあひだから、ところ

どころ絶えては續いてまたゝいてます。そのまたゝいてる光見ると、わたし、何やしらん息詰まるやうに感じたのんですが、「まあ、知らん間に晩になつてしもて、淋しいわなあ」と、光子さんが云はれました。「一人やつたらほんまに悲うてあられへんわなあ」云ひますと、「好きな人と二人だけやつたらこんな淋しい所の方がえゝわ」と、そない云うて光子さんはためいきついてをられました。「うちあんたと一緒やつたらいつ迄でも此處でこないしてたいわ」——わたしはその言葉口には出さんと、夕靄のなかにうづくまつて足投げ出してなさる光子さんの横顔眺めてましたが、暗いのでとんな表情してなさるのんか分りませなんだ。たゞ光子さんの白い足袋の向うに、大佛殿の金の鯉鉢が空のうすあかりに底光りしてました。「おそうなつたよつて歸りまひよ」云うて、それから山降りて、大軌まで歩いて行きましたら彼れ此れ七時になつてしまひました。「うち、お腹減つたけど、あんたどうする？」「けふは早う歸らんといかんねんわ。奈良良い行くとも何とも云はんと出て來たよつて」と、光子さんは時間氣イにしてをられました。「そない云うたかてうちもベコベコやわ。おそなりついでやよつてえゝやないか」云うて、無理に引つ張つて洋食屋い這入りました。「あんたどの旦那さん、おそなつても別に何とも云はれへんか？」と御飯たべながらそんな話が出まし